

～海外からも評価された、古き良き日本の原風景を一枚に～

川瀬巴水展

会期：2017年1月2日（月・休）→16日（月）

午前10時～午後6時30分（午後7時閉場）

※最終日16日（月）は午後5時30分まで（午後6時閉場）

会場：立川高島屋 8階催会場

主催：国際新版画協会（I.S.A.）協力：渡邊木版美術画舗、ギャラリーヌーベル

後援：立川市教育委員会、巴水とその時代を知る会

大正から昭和にかけて活躍した、版画家・川瀬巴水。日本中を旅して、日本の原風景の多くを木版画に残しました。没後60年経った今でも、日本をはじめ、海外からも、巴水の描く、日本の原風景は高く評価されており、多くのファンを魅了しています。故スティーブ・ジョブズ氏は来日した際に出会って以来、コレクションしていたと言われるほど、多くの著名人にも愛され世界に広がっています。

今回の展示では、無形文化財技術保存記録に認定された「増上寺の雪」をはじめ、現代でも桜の名所として、にぎわいをみせる「小金井の夜桜」など、貴重な初摺りを含めた、約140点をご紹介します。

なお、初摺りの60点あまりと、新版画の作家である伊東深水・吉田博など同時代の作家作品や、グッズ等も販売いたします。

また、会期中には、渡邊木版美術画舗代表取締役の渡邊氏や、国際新版画協会会長の鈴木氏による講演も行います。



（画像：「東京二十景 芝増上寺」（木版画））

川瀬 巴水(1883～1957)



明治16年(1883)、東京都芝区(現港区)で生まれる。25歳で父親の家業を継ぐが画家になる夢を諦めきれず、20代半ばを過ぎてからの遅い始まりながらも、洋画を経て、大正7年(1918)、伊東深水の「近江八景」に影響を受け、版画家に転向。以前、自宅にて行われたインタビューにて長女より、『とても几帳面な人で、おやすみの日も決まった時間に起き、(生活の)リズムを変えない人でした。』と話されているように、几帳面で、家族に見せる姿は温厚であったとみえます。しかし、お酒等嗜む際に、他人にお酌をされることを嫌がり、自分のペースで楽しむことを好んだ姿は、『日常にありふれた風景を切り取って描いてこそプロである。』と話す、川瀬巴水の作品に対する姿勢にも繋がっています。

大正新版画とは…

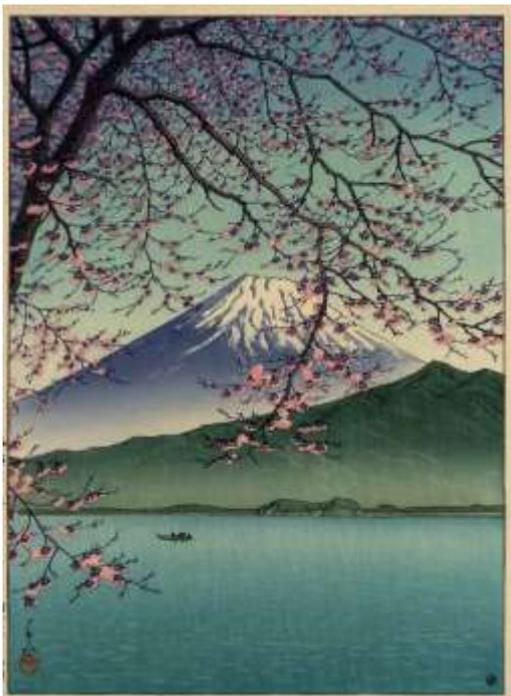
江戸の浮世絵が衰退し、大正中期に、より優れた技法で渡邊庄三郎を中心として浮世絵を再興する運動が起き、新版画が誕生しました。その川瀬巴水を生んだ大正新版画が100周年を迎えます。



(画像：「社頭の雪(井の頭弁天)」(木版画))

大正新版画の魅力

江戸時代の木版画に比べ、大正新版画は、摺り度数が圧倒的に多く、30～40度摺りをしているため、木版画特有の重たいインクの質感や、彫りの筆跡などの印象ではなく、線画に近い躍動的な描写や、色の重なり、強弱などまで繊細に表現されています。木版画とは思えない臨場感のある作品は、日本の原風景の風情や、木々の表情を描くのに最適です。100年経った今、再認識される大正新版画の魅力を、会場いっぱい展示・即売いたします。



(左画像：「西伊豆木負」(木版画))